

# 豊見城市史

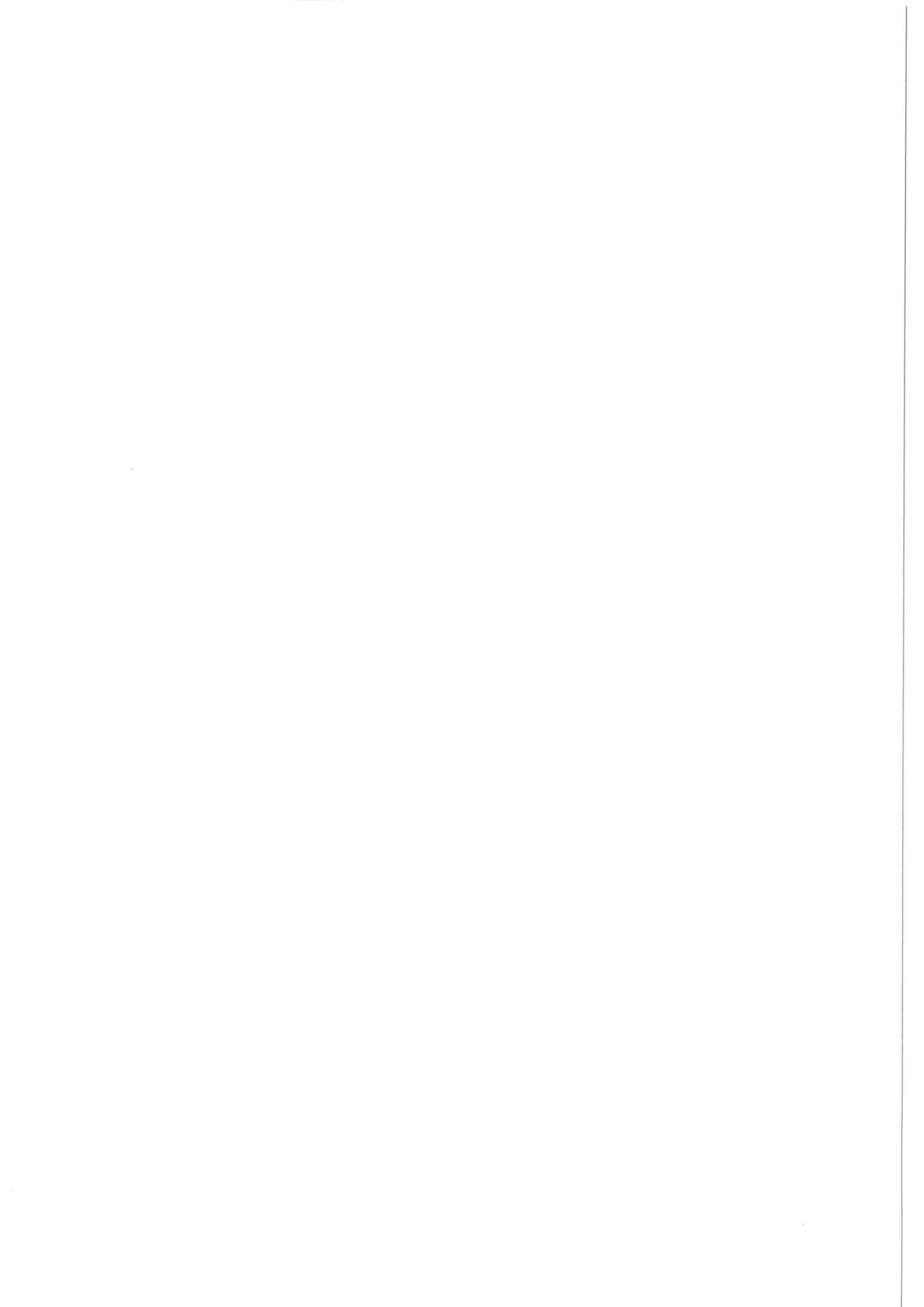
だより

第10号



2010

豊見城市教育委員会 文化課



# 目 次

はじめに

1. 八重山開拓のあゆみ	4	
2. 川原地域について	5	
3. 八重山の開拓村	6 - 7	
4. 八重山地域のマラリア	8	
5. 黒糖王国と呼ばれた川原地域	8	
6. 開拓で活躍した水牛	9	
7. パインで成功を収めた大城満栄	10	
8. 牧畜とオウシマダニ	10	
9. 証言	11 - 26	
①上原 恒正 ---- 11	②上原キヨ ----- 14	③当銘正助 ----- 16
④大城亀次郎 ---- 20	⑤当銘太郎 ----- 22	⑥当銘保亀 ----- 24
調査協力者・協力機関一覧	27	

むすびに

表紙について

初収穫の作物を手に

川原自治会 提供

写真は、川原に入植して1年後の昭和17年に撮影されたもの。  
後列左より、上原博、長嶺秀、上原恒正、大城亀一、上原康盛、上原キヨ、上原重雄。  
前列左より、長嶺竹一、長嶺政義、長嶺勇、大城亀次郎。

## はじめに

豊見城市教育委員会文化課では、現在『豊見城市史 移民編』の編集を進めています。2004(平成 16)年から事業を開始し、これまでに移民名簿類の調査や、市内・市外での聞き取り調査のほか、石垣島、ブラジル、ボリビアといった現地での聞き取り調査も行ってきました。

その中でも、今回、本稿に収録するのは 2007(平成 19)年 9 月に行った石垣島での現地調査報告です。

石垣島には、戦前、本市(村)から数名の開拓移民が渡り、川原<sup>かわはら</sup>という地域の開拓にたずさわりました。川原地域は、後にパインブームの火付け役になるなど、八重山の産業に大きく貢献した地域として知られています。

今回の調査では、本市出身者が入植して創設した川原地域を中心に、宮良<sup>みやら</sup>、名蔵<sup>なぐら</sup>、真栄里<sup>まえざと</sup>地域に在住している本市出身者、または関係者を対象に石垣島へ開拓移民として渡った経緯や生活の様子、戦争体験などについてお話をお聞きしました。

台風の接近により調査を切り上げたため、予定していた平野<sup>ひらの</sup>地域での調査を行うことができませんでしたが、今回の現地調査で得られた証言をもとに、本市からの八重山開拓移民についてご紹介いたします。

なお、本稿は 2009(平成 21)年 9 月に行った『わたしたちもトミグスクンチュ!!ー「豊見城市史 移民編」現地調査報告展ー』をもとに執筆しています。文中では、八重山開拓移民という言葉を使用し、また、敬称も省略しました。



現在の川原地域の様子 (2007 年)

『豊見城市史 移民編』編集に係る現地調査  
 —石垣島—

調査期間：2007(平成 19)年 9 月 28 日～ 10 月 4 日

調 査 者：崎原恒新(市史移民編専門部会員)

赤嶺みゆき(市史移民編担当嘱託員)

	月 日	時 間	日 程
1 日 目	9/28(金)	11:40 12:35 14:00 ～ 14:30 15:30 16:00 ～	那覇市→石垣島へ 石垣島着 石垣市文化課訪問 川原公民館へ挨拶 當銘正助氏への聞き取り
2 日 目	9/29(土)	9:00 ～ 午後	大城亀次郎氏への聞き取り 入植関係地域調査(宮良・於茂登)
3 日 目	9/30(日)	10:00 午後 15:00 ～	大城秀夫氏への聞き取り 入植関係地域調査(兼城) 上原キヨ氏への聞き取り
4 日 目	10/1(月)	午前 13:00 ～ 15:30 ～	上原重次郎氏への聞き取り 長嶺初子氏への聞き取り 具志堅興栄氏への聞き取り
5 日 目	10/2(火)	9:00 ～ 14:00 ～	当銘保亀氏への聞き取り 長嶺政義氏への聞き取り及び牧場撮影
6 日 目	10/3(水)	午前 16:00 ～	入植関係地域調査 (明石・平野・川原・大里・久宇良・伊野田) 當間清助氏への聞き取り
7 日 目	10/4(木)	12:05	石垣島→那覇市

※台風接近により、4日に実施を予定していた平野地域での調査は中止

## 1. 八重山開拓のあゆみ

琉球王府時代の八重山開拓は「島わけ」といわれる強制移住によるものでした。石垣、西表両島を取り巻く島々から人々を移住させ開拓、村建てをさせるというもので「寄<sup>よせ</sup>百<sup>びやく</sup>姓<sup>しょう</sup>」ともいわれています。

島わけは 1637 (崇禎<sup>すうてい</sup> 10) 年に宮古、八重山に課せられた人頭税の収益をあげるため、1800 年代まで行われますが、マラリアなどの病気や台風などの自然災害により、そのほとんどが廃村となっています。当時の島わけの苦しさ、悲しさは今でも八重山民謡の中に多く残されています。

1879 (明治 12) 年の廃藩置県により沖縄県が設置されると、失業した首里、那覇士族の救済策とした<sup>しょう</sup> 尚家の開墾事業をはじめ、日本本土、台湾から入植してくる人もいました。主にサトウキビ栽培と製糖が目的でした。1895 (明治 28) 年に糖業家・中川虎之助<sup>なかがわたらのすけ</sup>は機械による製糖をめざして八重山へ進出します。その時、農業労働者として中川と同郷の徳島県人が移ってきましたが、開拓の困難とマラリアで失敗に追い込まれました。

1929 (昭和 4) 年の世界恐慌が起これと、沖縄県内でも「ソテツ地獄」といわれるほどの不況が襲い、沖縄県振興計画が策定されます。それにより、沖縄本島から八重山諸島へ計画移民が行われました。1941 (昭和 16) 年には、豊見城村からも 12 世帯が川原地域<sup>かわら</sup>へ入植しています。

沖縄戦後の八重山開拓は、宮古島の木材不足を補うために西表島の住吉<sup>すみよし</sup>へ移ってきた宮古伐採隊が最初で、それに続いたのが 1948 (昭和 23) 年の宮古民政府の計画移民でした。

戦後の沖縄は、外地や疎開先から引き揚げてきた人々であふれ、また、米軍基地建設による土地の接収により生活に困難をきたしました。そのような中で、1952 (昭和 27) 年には琉球政府の計画移民が始まります。1957 (昭和 32) 年までの 5 年間に、沖縄本島、宮古、奄美、八重山の 48 市町村から 22 の開拓団が石垣島と西表島へ入植しています。石垣島最北端へ入植した<sup>ひらの</sup> 平野開拓団には、豊見城村出身者 5 人が含まれていました。



石垣島風景(2007年)

## 2. 川原地域について

八重山の川原地域は 1941（昭和 16）年に豊見城村の人々が中心となって創設した地域で、村建てと廃村を繰り返した八重山開拓の中でも成功した地域といわれています。川原地域への入植の背景には、次のようないきさつがありました。



上原恒雄

字名嘉地出身の上原恒正と上原重雄は、石垣島で仕事をしていた際、川原地域の広大な土地に惚れ、当時村長を務めていた恒正の父・上原恒雄へ話をします。話を聞いた恒雄は、当時石垣島で働いていた県土木技師に「良い土地があるようだが本当か」と確認をします。技師に「良い土地があるから直接見た方が良い」と言われた恒雄は、自ら川原地域の土地の下見を行いました。

その際、川原地域への移民計画があることを知った恒雄は、マラリアの有病地帯ということもあり、まずは親戚に入植の話を持ちかけます。親戚の一人である上原重秀は、フィリピンでの生活経験がありマラリアの対策方法をよく知っていました。この上原重秀と、長嶺政徳、恒雄の弟である上原博の 3 名を先遣隊として川原へ送り出します。土地を見た 3 名の話聞いた上原恒正、大城亀一、上原康昌、上原康盛、瀬長弘、安谷屋亀助の 6 人も計画に加わり、家族を残し最初に移住することになりました。この中に、炊事を行うために上原重秀の妹カメと、長嶺政徳の妻・ヨシも含まれています。地元八重山からは嵩原宜佐と入口竹蔵、昭和 16 年以前から石垣島へ入植していた豊見城村出身の當銘神助、當銘神徳、大城栄吉の 5 人が加わり、計 14 世帯が入植しました。しかし、入植した直後に安谷屋亀助がマラリアに罹り豊見城村へ引き揚げ、また、大城栄吉も椏海村（現米原）へと戻りました。

川原地域への入植は政府の計画移民であったため、1 世帯あたり耕地面積 2 町歩（6 千坪）、宅地 140 坪を 5 年後に払い下げるといった条件付きで、すでに土地改良も行われていました。入植当時は共同生活を行いながら家を見て開墾し、翌年には家族を呼び寄せます。

その後、川原地域はマラリアや幾多の困難を乗り越えながら、パインやサトウキビ産業に力を入れ、農業を中心とする村づくりに励み、八重山の産業に大きく貢献しています。

14 世帯からはじまった川原地域は、現在 72 世帯（平成 19 年）が住んでいます。

### ●川原地域への第一次入植者



上原恒正



上原重秀



長嶺政徳



上原博



大城亀一



上原康昌



上原康盛



瀬長弘



長嶺カメ



長嶺ヨシ



嵩原宜佐



入口竹蔵



當銘神助

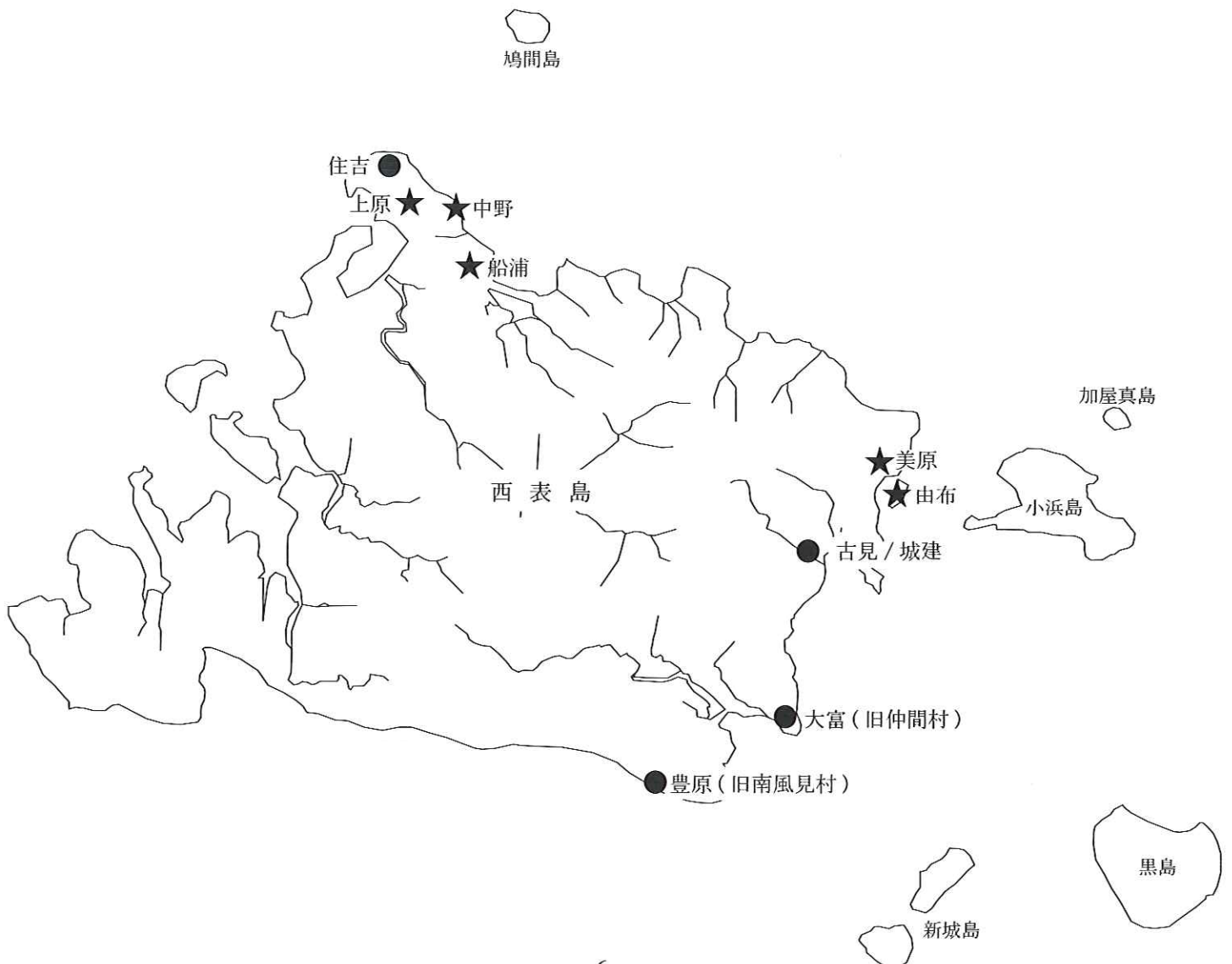


當銘神徳

### 3. 八重山の開拓村

明治から昭和にかけて行われた計画移民、自由移民によってできた開拓村を地図にしました(石垣島、西表島のみ)。豊見城村出身者の入植が確認された地域は、以下のとおりです。

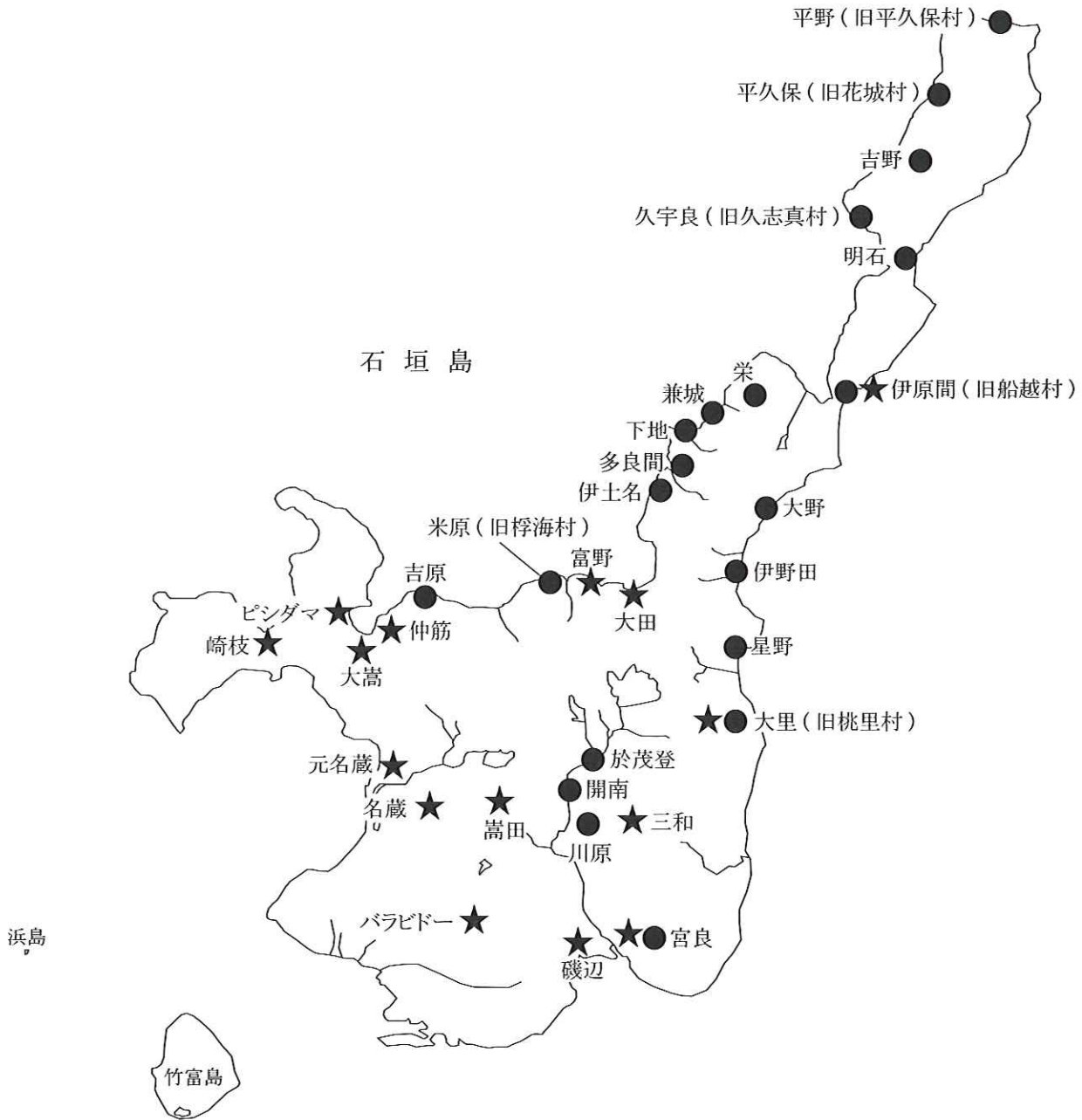
- 1、川原<sup>かわはら</sup>・・・1941(昭和16)年、字名嘉地、字田頭、字我那覇、字伊良波、字保栄茂から12世帯が入植。
- 2、平野<sup>ひらの</sup>・・・旧平久保村。1957(昭和32)年、字保栄茂から1世帯が入植。
- 3、開南<sup>かいなん</sup>・・・1938(昭和13)年、沖縄県振興計画によりできた村。戦後、豊見城村からも入植。
- 4、三和<sup>みわ</sup>・・・戦後、自由移民によりできた村。川原から移ってきた豊見城村出身者もいる。
- 5、宮良<sup>みやら</sup>・・・1954(昭和29)年、1957(昭和32)年に豊見城村から自由移民として4世帯が入植。  
4世帯が住んでいる場所は、<sup>かみだむら</sup>神田村と呼ばれている。
- 6、名蔵<sup>なぐら</sup>・・・1947(昭和22)年、隣接している<sup>たけだ</sup>嵩田と併せて43世帯が入植。豊見城村からの入植者も確認。
- 7、元名蔵<sup>もとなぐら</sup>・・・自由移民によりできた村。入植者の入れ替えの多い地域で、豊見城村からの入植も確認。
- 8、久字良<sup>くうら</sup>・・・旧久志真村。戦後、字保栄茂から1世帯が入植。
- 9、米原<sup>よねはら</sup>・・・旧桴海村。昭和16年以前に字保栄茂から1世帯が入植。





● ……計画移民

★ ……自由移民



#### 参考資料

- 『八重山郡勢要覧 昭和 14 年』沖縄県八重山支庁 /1939
- 『八重山要覧 1967 年 5 月』琉球政府八重山地方庁 /1967
- 『ドキュメント 八重山開拓移民』金城朝夫 /1988

## 4. 八重山地域のマラリア

マラリアはマラリア原虫がハマダラ蚊を通して人へ感染し、発熱をくりかえす伝染病です。三日熱、四日熱、熱帯性マラリアの3種類があります。

八重山の石垣島、西表島はマラリアの有病地帯で、琉球王府時代から続く開拓、村建てはマラリアによって廃村となる場合が多く、八重山開拓の大きな妨げとなりました。



八重山戦争マラリア犠牲者慰霊之碑

1917（大正 6）年に官民有志によるマラリア撲滅期成会が発足、1921（大正 10）年にはマラリア予防班事務所がおかれ、本格的な予防事業が始まりました。マラリアの被害が最もひどかったのは沖縄戦中と終戦後で、八重山では直接の戦争被害より多くの犠牲者を出しました。その頃のマラリアを「戦争マラリア」と呼んでいます。

戦後、八重山群島政府のもと防遏事業が徹底され、一時患者数は激減しました。しかし、八重山への計画移民がすすむにつれ、かつての廃村跡や隣接地に入植者らが送り込まれていきました。その結果、マラリアに罹る人が増加していきま<sup>かか</sup>す。事態を重くみた米軍政府は、昆虫学者のウィラー博士に調査を依頼し、防遏方法を根本的に変えていきます。3年間の根絶計画を立案し、実行した結果、1962（昭和 37）年には患者発生数がゼロとなりました。

川原地域では、入植したばかりの 1942（昭和 17）年に大黒柱の男性らがマラリアに罹って隔離され、数名が犠牲となりました。

## 5. 黒糖王国と呼ばれた川原地域

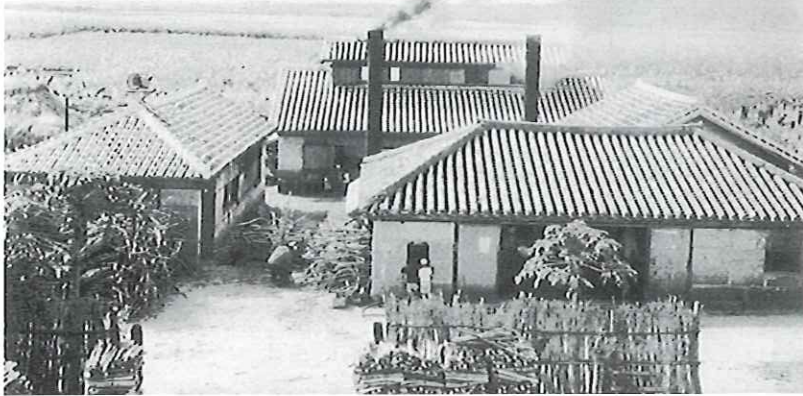
川原地域は、入植した当初は陸稻<sup>りくとう</sup>、サツマイモ、ヘチマ、トウガン、カボチャ、ネギ、ダイコンなどを生産し、戦時中はサツマイモを主に栽培して日本軍にも供出していました。

戦後は換金作物<sup>かんきん</sup>をサツマイモからサトウキビに切りかえ、八重山全郡にさきがけ製糖事業にのりだします。1948（昭和 23）年 1 月に製糖組合を 18 名で結成し、初代組合長に上原重秀<sup>しげひで</sup>を選出、茅葺きの 15 トン工場からの出発でした。

3年後の 1951（昭和 26）年には 30 トンの共同製糖工場へと拡大し、1日の産糖高は 1,620 キロとなりました。そして 1954（昭和 29）年には、24 戸で黒糖の生産高が年間 27 万 9,000 キロ、1戸平均で 10 万円の収入を得るまでになり、1月 19 日付『八重山毎日新聞』には「黒糖王国川原を語る 住みついて十三年」の見出しで紹介されました。

その後 1961（昭和 36）年に共同製糖工場は石垣島製糖株式会社に吸収され、操業を停止しました。

川原製糖工場全景  
(1954. 12. 8.)



川原製糖工場全景(1954年)



サトウキビの運搬の様子(戦後)

## 6. 開拓で活躍した水牛

水牛は 1933 (昭和 8) 年、名蔵<sup>なぐら</sup>へ入植した台湾人が田畑の耕作、荷車のけん引などに使用するために持ち込んだものです。

水牛は熱帯の動物で体温が上がると、水や沼につかって体温を調節します。粗食で牛や馬よりもずっと飼育しやすく、それでいて力があるので、機械力のない当時は荒地を耕すのに最適でした。1958 (昭和 33) 年には琉球政府が政府水牛貸付規定を設けて、無償で開拓民に水牛の貸し付けを行っていたほどです。貸付期間は牡牛の成牛が 1 ヶ年、仔牛が 3 ヶ年でした。



サトウキビ畑を耕す水牛(1967年)

川原でも水牛を使って農作業をしていました。また、戦後のことですが、八重山から水牛を購入したという証言が字与根や字田頭に残っています。その水牛は八重山と同じように農作業に使われたようです。

## 7. パインで成功を収めた大城満栄<sup>まんえい</sup>

大城満栄は、八重山のパイン産業発展の立役者です。満栄は字保栄茂の出身で、幼少の頃に父の呼び寄せでハワイに渡ります。そのハワイで苦労の末、パイン栽培のノウハウを習得し25歳のときには農場を経営するまでになりました。1939（昭和14）年頃、日米関係の悪化を理由に家族ともども帰郷しますが、農地の狭いことに落胆し、すぐさま石垣島へ移住しました。その時、満栄を頼って八重山へ渡った保栄茂出身者もいます。

満栄は水車で水を水田に汲み上げたり、ターフン（芋澱粉の類）を製造したりと農業におけるリーダー的存在で、1953（昭和28）年に保栄茂から移住してきた當銘神助<sup>でんぶん</sup>や弟の大城加那<sup>か</sup>と共に小型パイン工場を建設しました。その後は、台湾人の林発らと琉球缶詰KKを設立、1959（昭和34）年に琉球殖産KKと拡大させて引退しました。大城満栄は1961（昭和36）年5月3日、享年61歳で他界しました。

## 8. 牧畜とオウシマダニ



オウシマダニ撲滅之碑

古くから八重山では牧畜が盛んで、八重山では「マキ」とよばれる牧野が広がっていました。現在でも、平久保<sup>ひらくぼ</sup>、久字良<sup>くうら</sup>、伊原間<sup>いばるま</sup>には三大牧場があります。

豊見城市出身の入植者である長嶺政義<sup>せいぎ</sup>（字名嘉地）は、3万9千坪の牧場で牧畜を行っており、八重山の畜産業を担っている一人です。今日のような大規模な牧畜が行えるようになったのは、オウシマダニの駆除の成功が大きく影響しました。

オウシマダニは牛の伝染病であるピロプラズマ病を発症させる原虫を持ち、その原虫が体内に入った牛は貧血と発熱をおこし、やせおとろえて死にいたる場合もありました。八重山では1933（昭和8）年、1937（昭和12）年、1953（昭和28）年にピロプラズマ病が大発生し、肉用牛の半数近くが死亡、壊滅的な打撃を受けたこともありました。そのため八重山はオウシマダニの汚染地域として、牛の移動が制限されていたのです。

そのオウシマダニは関係者の苦労の末、1996（平成8）年に駆除が終了し、1999（平成11）年に牛の移動制限が解除されました。移動制限の解除により、八重山地域での飼育頭数はここ10年で約2.5倍と大きな伸びをみせています。

## 9. 証言

今回は、豊見城市内や石垣島で聞き取りをした 25 名の証言の中から、6 名の証言を抜粋しました。川原への計画移民 4 名、宮良・名蔵への自由移民 2 名の証言です。

### ①上原 恒正

大正9年10月21日生、字名嘉地出身

調査日時／2007 (H 19), 11. 13 場所／上原恒正 宅 (宜保 在)

聴取／赤嶺みゆき テープ反訳・文／鳥山やよい

**八重山入植の経緯** <sup>いさきざつ</sup> 私は入植しない前に一度八重山で赤下橋の護岸工事をしました。上原重雄さんと一緒に沖縄から八重山に来て、あちこち見て回っていたらお金がなくなってしまいました。その時、ちょうど護岸工事の人夫の募集があったので、ちょっと金儲けしようと思いました。工事は2、3日でした。私は沖縄から出て自分の土地を持つ希望を持ってました。17、8歳の頃、最初は大阪に行きましたが、都会での生活は性に合わない、今度は八重山に行ってみました。そこで川原の広い土地を見つけたわけです。その時は畑ではなく原野で、川原の土地を見ながら「ここに土地があったらなあ」と思ったわけです。沖縄に帰って父に話したら、父はサトウさんという土木技師に電話して聞いてました。サトウさんは県庁職員でその時は八重山にいましたから「息子がそう言ってるがどうか？」と聞いてました。私の父は村長（第5、6代・上原恒雄）で、サトウさんは与根（豊見城村与根）の護岸工事もやりましたから、その関係で父と知り合いだったのでしょう。

もともと私は広いところで農業をやろうと思ってました。というのも、その時は満州へ義勇軍の申し込みがあって私も行こうと思い、同級生と一緒に申し込みました。すると私の名前だけが知らないうちに消されていました。父が消していたのです。私は長男でしたから、家について跡を継いでほしいという願いが父にはあったんだと思います。頑固な父でした。しばらくして満州に行った同級生から「満州は広いよ、良いところだよ」と手紙がきました。私はその手紙が頭にずっとあって広い所に出たいなあと思ってました。その時は名前を消した父をちょっと恨んでいました。

八重山で土地といっても原野で、それにその時はヤキー（マラリア）の本当の怖さは知らないです。サトウさんに連絡したら、ちょうど沖縄県の移民計画があるから「まず見てみたら」ということになって父は視察に行きました。帰ってきた父は「今度はヤキーの所だから別の人から行かせるわけにはいかん」と、自分の親戚を集めて「八重山にこういう土地があるかどうか」と話を切り出しました。親戚の上原重秀はフィリピン<sup>しげひで</sup>帰りがたのでマラリアを知ってました。マラリアは悪性でなければ恐れることはないというので、八重山への入植が決まりました。入植のことは本当にサトウさんのお陰でした。この話は父と私とのことで他の人は分からないはず。昭和16年、八重山に行くことが決まったときに結婚しました、21歳のときです。

**共同生活** 入口竹蔵さんの家だけが瓦葺きで他はみんな茅葺き<sup>かやぶ</sup>の家です。入口さんはヤマトンチュ（日本本土の人）で私が入植した時には八重山の別の場所から移ってきてました。

入植したときは2軒だけ家が建っていて、3軒目の入口さんが家を建てはじめてました。この2軒の家に共同生活をして、1軒に寝泊して、もう1軒で飯を食べたりしてました。妻子は最初から連れて行けませんから、やっとみんなの家ができ、米も収穫できた約1年後に呼び寄せました。豊見城村から7家族が入植しましたが、他から移ってきた方もいます。保栄茂の人で昭和16年以前に裏石垣（石垣島の東、川平から平久保半島のつけ根にいたる地域）の桴海村に移民していた大城栄吉さんもそうです。また、石垣内の別の地域から具志堅興徳さん、當銘正助、神助さん兄弟、嵩原宜佐さんが加わりました。

私が最初ここに来たとき、地元の人には肥料を畑に入れるということを知りませんで、馬の肥で堆肥をつくることも知りませんでした。八重山は土地が広いですから、開墾して作物を2、3年作って出来なくなったら、また別の土地を開墾するという農業でした。

最初の年から作物はできましたよ、1畝を掘ると芋が500斤、2畝掘ると1,000斤も穫れて、機械がないので鋤で掘りました。

**マラリア** キニーネは戦後アメリカが持ってきた黄色い薬で、飲みすぎるくらい飲んで身体も黄色くなりました。また、水たまりに薬を撒いて、家の中も白くなるほど撒かれました。マラリアといったら地元の人でも「ヤキー」といって怖がりました。地元の人には川原に遊びにきても、夜は絶対泊りません。戦前はマラリアの薬はなかったのです。だからみんな罹りますよ。用心して、夜、顔も足も手ぬぐいをグルグル巻いて寝るんです。まあ若い連中はそうでもなかったから、若い者から罹りましたね。あの頃はまた飯を炊くのも薪で、全員が山に薪を取りに行きましたから、蚊にはさされます。蚊取線香なんてないですよ。フーチバー（ヨモギ）を枯らして炊いて煙をだしたのを使いました。どこの家にも蚊帳はありました、これがないと危ないです。それと上原重秀さんと長嶺ヨシさんはフィリピン帰りでしたから、フィリピンでもマラリアを経験してるのでよく分かっていました。ふつうのマラリアはガタガタ震えるだけで、ご飯は食べることができます。でも怖いのが悪性マラリアでした。私の妻は一人悪性に罹って15日間、熱が出て大変でした。畳をおこして竹の床にじかに寝かせて、青年たちが井戸から汲んでくれた水をホースでかけました。15日間、昼も夜もずっとです。そのとき妻は長男を身ごもっていたので、ヨウワ病院のお医者さんが1日3回も診にきてくれました。



ヨウワ病院前での家族写真(1960年代)

**戦争** 川原での戦争はわかりませんが、聞いた話では妻が子供らを引き連れて全員、山に避難したということです。開南の後ろの於茂登岳に防空壕がたくさんあったということで、どこの部落はどこと避難させられ、馬車に荷物を乗せて、昼ではなく夜に移動したということです。

一緒に移民してきた長嶺政徳は召集されて沖縄本島のヤンバルで戦死しました。私も召集されて長崎県佐世保の海軍航空隊に配属され、自動車運転の訓練を受けた後に、大村航空隊に配置されて燃料車の運転をしていました。特攻艇の運転は自動車用の免許でもできたので、いつ

かは出撃の命令をうけるのではないかと思ってました。またそこは特攻隊の出撃地でもあったので、特攻を命ぜられた兵士が帰って来なかったのは辛かったです。長崎に原爆が落ちたときは食糧をとり田舎の方へ行っていて、私はそれで助かったようなものでした。部隊に戻ったら大騒ぎで、町は大変な惨状でした。

そこで終戦を迎えて、宮崎に疎開していた豊見城の家族のもとへ行き、1年あとだったか、沖縄本島より先に八重山に帰れました。沖縄が玉砕<sup>きょくさい</sup>したと聞いてから状況がまったくわからなかったの、家族の顔を見たときは本当にホッとしました。

**パイン栽培と工場** 私たちが入植した頃は名蔵にたくさんの台湾人がいました。終戦後にほとんど台湾に引き揚げましたね。台湾人の林発<sup>りんはつ</sup>さんは名蔵に小さなパイン工場を持っていました。保栄茂の大城満栄さんと同じで昭和16年以前にここに入植したはずです。満栄さんはハワイ帰りでパインをやっている、苗もハワイから取り寄せて、保栄茂出身の人たちに栽培させてました。戦後のパインブームの頃、川原は苗を売って儲けました。満栄さんと林発さんがやっていたのはリュウカン（琉球缶詰）です。満栄さんが社長<sup>あらかわ</sup>で新川に大きな工場を建てて、川原の人はほとんどリュウカンの株を持っていました。それで川原で作ったパインはほとんどリュウカンに入れて缶詰にしていました。私はリュウカンとオキカン（沖縄缶詰）と両方に入れてましたね。それと地元の人にはパインに慣れてないですから、女工としてすぐ工場では使えません。台湾はパイン工場の先進地だったので、リュウカンには台湾の工場から女工が派遣されて地元の人に教えてました。毎年来ましたよ。会社ぐるみで募集して、台湾人の監督が連れてきました。

私は台湾に3泊4日の研修旅行にいったことがあります。パインを百トン以上作った農家を三井物産が招待してくれて、向こうで大歓迎されました。私は妻と一緒に1日7トン、トラック1台分を出荷するときもありました。7町歩（2万1,000坪）の畑に山はパイン、平らな土地にはキビを植えてました。それと開南の下の方の川沿いに田んぼも持ってました。パインは会社がトラックを回して、山で計量して1斤いくらか持って行くのです。トゲのない品種がよく売れました。自分で改良するんです。パインを栽培して、これはいい、これはダメと印をつけて種をとって、その種を栽培する。これを繰り返しました。栽培してて困ったのはオオコウモリでしたよ。夜に実が熟する時間に下りてきてパインを食べるんです。

**引き揚げる** 私が豊見城村に引き揚げてきたのは、日本復帰の頃です。川原での財産をある程度処分して、現在の家を建てました。復帰前に米ドルで発注して、建てた家に移った時は日本円で支払いました。八重山で私は人を雇ってキビとパインと米を作りましたが、復帰の境に雇える人がいなくなりましたね、みんな本土に働きに出て行きました。引き揚げた一番の理由はこれです。それに子供たちも成長してましたからね。八重山は生活するには良いところで、子供を育てるには一番上等でした。あの時に1ヵ月80ドルも（沖縄）本島の学校にいる子供に仕送りできたのは八重山にいたからです。でも、子供たちは学校に行かせたら戻ってこないんだよね。男の子だったら嫁さんがきてくれるかどうかの心配もあるし、残っていても若い者は四箇<sup>しか</sup>（石垣島南部の登野城、石垣、大川、新川をさす）に住んでるしで、私はそのことも見極めて引き揚げました。

豊見城の家では庭に果樹などを植えて楽しんでいます。何年か前に妻と北海道に行ってきましたが、またまたあっちに惚れましたよ。北海道は 2、3 時間走っても見渡すかぎり畑で広いのです。

## ②上原 キヨ

昭和4年1月5日生、字名嘉地出身、童名<sup>わらびな</sup>／カミー  
調査日時／2007 (H 19). 9. 30 場所／上原キヨ 宅 (川原 在)  
聴取／崎原恒新、赤嶺みゆき テープ反訳・文／鳥山やよい

八重山へ 私は昭和 17 年に第二豊見城校の高等 1 年を卒業して、父の上原<sup>ひろし</sup>博と二人で八重山に来ました。当時はヤマト (日本本土) に軍需工場がありましたが、そこへ行くよりは父と石垣に行った方がいいと思ってこっちに来ました。出港した港は覚えてませんが、石垣島の港に着いて<sup>はしけ</sup>艇に乗って上陸しました。昼だったと思います。宮古経由でしたかね、船の名は慶運丸<sup>けいいうん</sup>か湖南丸<sup>こなん</sup>で貨物船だったと思います。港から馬車に乗ってヘーギナー橋 (平喜名橋) を通る道を行って川原に着きました。

昭和 16 年に先発隊が行って、名嘉地から父の上原博と上原恒正、長嶺カメ、上原重秀が参加していました。それも含めて全部で 7 家族です。最初は共同生活で、家ができれば 1 戸、1 戸分かれていきました。茅葺きの家でした。それと畑は 2 町歩ずつありました。1 年後、川原に来た頃は私は 15 歳ですから水汲みとか洗濯などの仕事しか出来ませんでした。井戸は 2 ヲ所ありました。私は父と二人でしたが他は家族で来てました。長嶺カメさんも家族で来ていて、上原恒正さんは夫婦で子供も一緒でした。まあ親戚同士で 7 家族です。なぜ八重山に移民したかというのは聞いてません、父はそんな話はしませんでしたね。私は父が行くからついてきただけです。

食事の段取りは長嶺カメさんがしていたのでどうだったかわからないです。普段どんなものを食べていたか覚えていませんが陸稲とか作っていて、芋の種類は百号でした。生活していくのにお金も必要だったろうけど、どうやってたのか？それがわからないんですよ。父は農業だけで、木やタムン (薪) を伐って売りに行くということはなかったです。

実の母は (沖縄戦で) 艦砲の破片で亡くなりました。長男は川原に来てましたが、徴兵検査にいてそのまま兵隊にとられて亡くなりました。

## 川原での生活

マラリア マラリアの薬は保健所の方が各家に配ったのではなく、1 日 1 回馬車で畑に行く人を止めて飲ませてました。また保健所からマラリアの進み具合をみるため<sup>ひぞう</sup>脾臓を調べにきました。寝かせてお腹を触診して投薬してくれました。マラリアには種類があって悪性は毛が抜けるほど強かったです。

学校 川原部落は字大浜です。ワラビンチャー (子供達) は小学校は川原、中学校から大浜まで行ってました。小学校は最初は川原の部落内にありました。豊見城から入植した瀬長弘さんの住んでいた家でやっていた川原の分校ということです。いつ頃まであったかは覚えてません。瀬長弘さんと娘のフジさんが先生をしていました。



**生活用品** 洗濯は井戸でして、汚れはパインの灰汁（あく）を使っておとしました。パインを切ったらヌルヌルするのがでるでしょ、あれですよ。それを薄めて使います。頭を洗うのはヌチャグワー（赤土）を水につけて、そのうわ水で洗いました。アカバナー（ハイビスカス）の花もあったそうですが使った覚えはないです。お店といえば、川原では當銘正助さんの家がやっていて生活用品を売ってました。素麺、醤油、缶詰類、お酒などです。三和にも店はありました。入植したての頃は四箇まで買いに行きました。

**産婆** 川原にはスナガワさんという産婆さんがいました。夫婦とも宮古の方です。お産のときはその人に頼みました。免許は持っていたと思いますが、あの頃のことなのでわかりません。

**ウガンジュ** 川原にウガンジュ（拝所）はありません。戦後ですけど、長嶺カメさんがユタに頼んでウガンジュを作りました。マエクラさんという登野城とのしろにいたユタで、与那国の人でした。「ウガンジュを拝んだら部落が栄えるよ」と言ってましたが、誰も拝む人はいませんでした。

**戦争** 戦争が強くなったとき於茂登山おもとに避難しました。避難先は場所が部落ごとに決まっていた。於茂登山には十日ほどいたけど、沖縄が玉砕されたと聞いたので、艦砲射撃されたらどこに逃げてもしょだと思い、家に戻りました。もう沖縄には誰一人いないと思っていました。家に戻った後は、宮良川の土手に簡単に穴を掘って避難壕にしましたが、私は上原重秀さんの壕に行ったり、長嶺カメさんの壕に行ったりしました。一度「爆音どー」って聞こえたから、私は走って逃げました。あれはヘーギナー飛行場に爆弾が落ちたときだったかな、人間は慌てたときは自分のことで精一杯ですよ。

戦後、川原の部落内にアメリカ兵が来て、日の丸の旗をとって歩いてたという事です。女の子なんかは強姦するという噂があったので隠れたのを覚えています。

**結婚** 主人は名嘉地出身で、その両親も名嘉地でしたので、それで親に認められました。戦後の昭和 23 年に結婚して独立しました。夫は川原ではなく大川に住んでいました。夫の両親は昔ふうにいえば駆け落ちして八重山に来たということでした。あちこちでヒヤク（日雇い）してたそうです。結婚して最初の頃は、大川に住んでいて川原の畑に通いました。馬車で 2 時間ぐらいです。土地も 2 町歩（6,000 坪）買いました。私たち夫婦には 4 人の子供ができました。

最初はアラブルヤーです。自分で山に行つて木を伐つて二部屋の小さな家を造りました。よくもあの小さい家で子供 4 人育てていたなと思うぐらいの家です。最初は竹の床で、炊事場の方は板でした。子供 4 人とも大川で生まれて、それから川原に引っ越しました。

**農作物と家畜** お芋を主に作りました。それを酒屋やカマボコ屋にだしたり、ウムクジにしたりしてました。酒屋の名は新垣といって大川の今の博愛病院のところにありました。芋酒を作ってたと思います。それとお母さん（姑）が豚を飼ってました。母豚を飼って、子豚を 6 ヶ月養って出荷してました。1 回のお産で 11 か 12 頭ぐらい生まれたかな、私は農業だけやってたので詳しいことはわかりません。ワァーチキヤー（種付け豚を連れてくる人）も新川から来ました。鞭で雄豚をおいたてて歩かせてました。あの頃は黒い豚でした。

お芋の次にはパインとサトウキビを同時に作ってました。キビの種類は太茎種の 61 号で、砂糖樽に詰めてイシカワ商会に出荷してました。サーターヤー（砂糖小屋）は学校の裏にあってグループは 10 チネー（世帯）でしたか。製造人は私の弟と主人の妹がやってました。だから製糖の時期はあの小さい家に 6 人も下宿させてました。ジーマーミ（落花生）は私の父が食べる分だけしか作らなかったはずです。現金収入は山から木を伐りだして四箇に売りに行行って得ました。



川原製糖工場前での記念撮影(1948年)

パイン工場は7つぐらいあって、私たちはオキカン(沖縄缶詰)に出荷しました。工場には宮原、砂川というのもありました。最初はリュウショク(琉球殖産)に出荷しましたがオキカンの方がいいということでした。値段がよかったのか、知り合いがいたんじゃないですかね。種類はハワイ種です。今も長男が牛を養いパインや砂糖キビを作っています。

川原に移ってから家畜は馬が主でした。山羊、豚はいません、馬が好きだったんです。与那国馬ではなくて雑種の大きい馬すきで鋤のためと馬車のために養いました。鶏は原野に放し飼いでしたから、卵を見つけるのが楽しかったですねえ。馬小屋から堆肥もつくりましたよ。肥料は大浜農協から買いました。

**お墓** 父は八重山に行ったとはいえ本籍は移しませんでした。豊見城の土地に戻って92歳で亡くなりました。家は我那覇と名嘉地の間にあります。私たちは沢岬門中たくしで門中墓わんちゆうぼかは名嘉地にあります。川原のお墓は家族墓で、部落から離れたムイグラー（森）にあります。八重山の葬式は沖縄と違って告別式のあと火葬してお墓に行きます。川原でも八重山式でやっています。

**ザートウク** 行事は沖縄式も八重山式も混ぜてやっています。八重山の十五夜はお月見もやってススキも飾ります。十六日も清明もやって、ムーチーもやる。そしてお正月は鏡餅。

ザートウク（座とく）は毎朝ウチャトーをして、ヤーニンジュ（家族）の健康をお願いします。それとトーカチ（米寿）、結納などのお祝いごとはザートウクで拝みます。

シチビシチビは仏壇だけ拝みます。十五夜、十六日、お彼岸なども仏壇です。八重山はザートウクが大きいです。そして非常に綺麗に飾るんですよ。字も飾ります、今飾っているのは「福ふくろくじゆ禄寿」です。いろいろお祝いによって変えるのです。

### ③當銘 せいすけ 正助

大正 15 年 1 月 5 日生、宇保榮茂出身、童名／クーカミー  
調査日時／2007 (H 19) . 9. 28 場所／當銘正助 宅 (川原 在)  
聴取／崎原恒新、赤嶺みゆき テープ反訳・文／鳥山やよい

**八重山へ** 私は大正 15 年 1 月 5 日に保榮茂で生まれました。屋号は新仲門才ミーナカジョーセズン順です。童名はクーカミーでした。妻の秀子（旧姓・長嶺）はフィリピン生れですが、5、6 歳の頃名嘉地

に戻ってきてます。妻の実家の屋号は<sup>サンナンメー</sup>三男前<sup>メーシムクージ</sup>又前下越地です。

八重山へは昭和 14 年に姉の大城ウシと一緒に行きました。姉は昭和 10 年頃に当時ハワイにいた大城満栄<sup>まんえい</sup>さんの元呼び寄せで嫁いでました。満栄さんはハワイで砂糖キビやパイナップルを作っていて、帰郷後、せまい沖縄では農業は出来ないと各地を視察してました。それで八重山がいいということで、ここに来たそうです。私は小学校卒業後、両親は保栄茂にいましたが、八重山に行きたくて姉についていきました。船は湖南丸といって戦争で沈んじゃった船で 300 トンほどだったと思います。那覇の港から夕方出て翌日の夕方は宮古の平良港に着いて、そこから 1、2 時間で八重山に着きました。沖棧橋にサンバングワー(舢舨)に乗って上陸しました。

最初は姉の家に居候して登野城に 1 年大浜に 1 年ほどいますが、兄が戦地から帰ってきたので兄と一緒に川原に移りました。畑はシーナ原<sup>ぼる</sup>に 12 町歩 (3 万 6,000 坪) を兄弟、甥の 3 人で組合を作って購入しました。

**マラリア** 八重山にきて最初に住んだ所は登野城です。登野城に住んで川原の畑に通ってました。その頃はマラリアが大変で、2 ヶ月もたたないうちに罹りました。小さい子供は頭も禿げて大変でしたよ。それで豚の脂を食べて栄養をつけるようにしてました。豚はたくさん飼ってましたよ。マラリアには三日熱と熱帯熱があって、三日熱は熱が強くて脾臓が腫れます。熱帯熱は弱い熱だけど毎日です。「マラリア班」というのがあって毎月採血してました。それと便所や排水とか調べてマラリア菌があるかどうかを調べてましたね。日本の薬はアデブリンで白い丸薬です。1 日 3 回、1 回に 16 錠飲みました。アメリカの薬はキニーネで黄色いものです。1 日 3 回食後に 1 錠飲みます。薬は衛生部から各世帯にきました。戦争が終わってからマラリアが大流行しました。川原でも同じです。戦争中にアメリカがマラリア菌をまいたという噂もあつたくらいです。

**ハンセン病** ライ菌の検査 (ハンセン病の検査) もありました。今は人権蹂躪<sup>じんけんじゅうりん</sup>といわれますが、昔は血液検査してみつかると屋我地<sup>やがじ</sup>(愛楽園)や宮古(南静園)に連れて行かれました。何ですかね、ライ菌を持っている人の子は流産させたとかで問題になっていますよね、患者はかわいそうでしたよ。チュラカーギーター (顔立ちのきれいな人達) が罹ると色も白くなってね、それでシマ (故郷) にもいられない、子供たちも別に移住したのもいます、親戚中にもそういうふうにいわれるしね。戦後は磯辺に患者を隔離するところがありました。でも宮古に送られたからそんなにいなかったでしょう、巡査が連れて行ったということでした。

**家** 入植当時の家は茅葺きの家です。建築材料には補助があって角材がありました。屋根の材料は自分で調達しました。マカヤは於茂登山にたくさんあって、馬 1 台の入林代が 4、5 円だったと思います。ユイマールで各家作っていきました。床は竹で作ってその上に畳を敷きました。屋敷は 12 坪で部屋が 2 部屋に炊事場、クチャグワー(裏座)、押し入れつきです。台所は全部土間。カマドは土にワラを刻んで入れたもので作り、火事にならないようにカマドの後ろ側は余裕があって、壁は炊事場はチヌグ、それ以外は板壁です。製材所はたくさんありましたよ。

**芋、米** 入植したての頃は芋を作っていました。種類はイナヨー、ヘンナヨー、メーザト、マチネー 100 号。私たちはタイワナーを植えました。この島では芋のことをアッコンと言ってましたね、芋は 6 ヶ月から 1 年で収穫できましたから年中食べられました。陸稲はほとんど食用でした。パインの前は米も作ってます。八重山で最初に水車を作ったのは大城満栄さんですよ、弟の加那さんと田んぼに水を引いてました。稲の種類はハネジクルー（羽地黒穂）ではなくタイチュー（台中）だったかな？陸稲は湿気がある方がよくできましたが、雑草が大変で草取りはヒヨウ（日雇い）を頼みました。おばあちが登野城、大浜辺りから 8 キロも歩いてきましたよ。年寄りがかかるのは目的があって、ユンタ、ジラバを習って歌うためです。歌が分かる人がたくさん集まるって喜んでできましたね。日当も貰って歌も覚えてとということでした。

戦前からどの家庭にもショベル、ヒラベ、カマター、ミマターを使ってました。鋤は木製も鉄製もあって鍛冶屋に作らせてました。田んぼに使うクルバシャー、マーガンも水牛に引かせてました。それとカマター木に荷物をのっけて馬に引かせたり、馬の鞍に木をかけたり、木ばかり鞍に結んで引かせることもありました。

**馬車** 戦前は馬を飼ってました。鋤をかける馬とサーターヤーの馬です。どこの家庭にも馬は 2、3 頭いましたね。サーターヤーの動力は馬です。八重山にも「シマ馬グラー」がいて、ナーク馬（宮古馬）と与那国馬です、エーンマ馬（八重山馬）と与那国馬は別で、エーンマ馬は大人しくて与那国馬は荒かったですが、一見してはわかりませんね。盛んなときは八重山でも 1 年に 1 回競馬がありましたよ。大駆けではなくて細駆けの競馬です。細駆けしたらトコトコだからお尻が痛くなるね。競売に出して細駆けの上手な馬は値段が高かったです。水牛もいましたがね、普通の牛を飼ったのは一時で食用に 1、2 頭飼ってるだけでした。でも満栄さんとは 4 頭はいました。鶏は放し飼いで名古屋コーチンでした。庭で放し飼いだから、ひよこと卵はカラスや隼が上の方でみてて、よく捕られました。

戦前は四箇まで馬車で買い物に行きました。鰹節、メリケン粉、石鹼、素麩、油、缶詰、酒から石油まで生活に必要なものは全部ありました。鰹節は 10、20 キロも注文して買いました。また行商人が来るときもあって現金で買ったり、掛けで買ったりでした。川原に店ができるのは戦後のことです。

それとは逆に戦後には馬車で芋を売りに行きました。芋はイトマンチュ（糸満の人）が多く買ってくれましたね、カンブクヤー（かまぼこ屋）とかウミンチュ（漁民）の家でコーイングッ（雇い子）の多くいるところです。コーイングッは各家庭にいて歩いているとわかりますから、そこに声をかけてました。カシガー（南京袋）に入れた芋を竿秤で量り売りします。個人だと 2、30 斤買うのが多く、注文で 60 キロ、100 キロと買ってくれる人もいました。芋を売った帰りに日用品を買って帰るのです。

馬車に乗って村の何人かと一緒に芝居見物に出かけたこともありました。翁長一座のいるマンセイ館に馬車を乗り付けて 1 日かかりでした。

**井戸と川** 井戸水は畑から流れてくる水も混ざるから水質は悪いです。戦前から水道が引かれるまで洗濯は井戸水を使ってました。お風呂も家で入りましたが、井戸から水を汲んで担いでタンクに貯めました。タンク 1 杯で 1 日分ありましたね。干魘のときは井戸から汲めない

ので川に水汲みに行きました。その時は川に馬車ごと入れたし水も綺麗でしたね。今はマエザトダム(真栄里ダム)、スクバルダム(底原ダム)が出来たので水の調節ができるのでしょ、橋を水が越えるということはないですね。

**砂糖キビ** キビの種類は<sup>たいけいしゅ</sup>太茎種の 25 号だったと思います。その後NCOが開発されました。砂糖キビが最初の換金作物で、砂糖が主な収入源になりました。特に戦争後は砂糖キビとパインです。戦前は自分たちのサーターヤーで砂糖は作っていて、戦後はヤエトウ(八重山製糖)に出していました。サーターヤーは発電してエンジンで動く鉄車でした。イシトウ(石垣製糖)が出来ると直前まであって、イシトウに買収されたのです。買収の交渉は長かったですよ、補償金の交渉だったろうと思います。イシトウは農協が主体でやっていた工場で、ヤエトウはミヤラカンサイが建てた工場です。後になってヤエトウはイシトウに吸収合併されました。合併後のヤエトウはハーベスター、トラクターとか、整地、苗栽培などの事業を手がけていました。

**パイン** パインの種類は、ドゴールはちょっとリンゴみたいな匂いがある小さいです。缶詰にはスムースカインがむいてますよ、郵パックに出しているのはこの種類が多いし、作られているのもこの種類が多いと思います。パインは植えてから 2 年目で収穫します。収穫したらまた植え替える。植えるのも手ではなく機械でやります。運転手がトラクターに乗って、二人は後ろに乗って土を被せます。苗があったら 1 日で 400 坪は植えました。うちの子は 6,000 坪の畑にパインを作ってますよ。



川原に広がるパイン畑(2007年)

**ネズミ、猪の被害** 入植した頃は猪の被害も大きかったですね、以前は山にパイン畑がありましたから被害が頻繁<sup>ひんぱん</sup>でした。一晩に相当食い荒らされました。ネズミの被害も 10 年前まではかなりのものでしたね。パインはちょっとでも傷のあるものは郵パックには出せないし、虫が食って変形したものも売れないしで、多いときは 100 キロも無駄になりました。でもこれはジャムに加工して出すので売れ残りはないです。

「ネズミ退治の日」というのがあって 20 年前の復帰後もしばらくありました。退治したネズミの尻尾を買い上げるのです。市役所に持っていったと思います。それから戦前は「シムシ取りの日」というのがあって、キビはまだ小さい 50 センチぐらいの時期にやりました。川原だけでなく八重山全体でやりました。

**戦争** 戦争時はよく徴<sup>ちようよう</sup>用に行きました。ヘーギナー飛行場とか白保とかです。ヘーギナーの海軍壕も掘りました。白保では飛行場を作るための松を伐るため、川平まで行きました。川平には松木がたくさんあって 1 日ばかりで 2 本伐採して馬車で運びました。馬は川平の人のもの

のでした。名蔵回りで、大橋はなかったので干潮に渡って、明和の大津波の潮が流れ込んだ谷間づたいにトドロキ(轟川)から名蔵、アカシチャ(赤下)を通って行きました。軍事徴用で2、3日だったと思います。ヘーギナー飛行場は戦前からあってネッケン(熱帯島嶼研究所)の周辺です。海軍飛行場で練習機がほとんどでしたから、滑走路は800メートルしかなかったです。小型の2枚羽の飛行機で4、5機はありましたかね、白保飛行場の方が飛行機の数は多かったですよ。避難したのは家の側の防空壕でした。今の大浜町の水道の水源地の側に第3避難所がありました。この壕は大浜の人が入る壕でしたが、川原の人も入ってよかったんです。

**郷友会** 保栄茂郷友会はビンチュ(保栄茂の人)だけが入れます。川原だけでなく八重山全体から参加していて、宮良、登野城、名蔵に住んでる人もいます。20世帯ですかね。保栄茂だけです郷友会をもってるのは、それからいうと保栄茂は勢力がありますよ。他の字の人も遊びには来ますけど、郷友会自体には入れません。でも保栄茂の人を嫁にした者、保栄茂の人に嫁いだ者は入れます。豊年祭、十五夜遊び、カラオケ、敬老会などをやっています。

#### ④大城 <sup>かめじろう</sup> 亀次郎

昭和13年3月1日生、字伊良波出身

調査日時/2007(H19).9.29 場所/大城亀次郎 宅(川原 在)

聴取/崎原恒新、赤嶺みゆき テープ反訳・文/鳥山やよい

**入植** 私は昭和13年3月1日、字伊良波に生まれました。童名は兄まではありましたが、私の世代からはありません。3人兄弟の二男で、長男と三男は生まれてまもなく亡くなりました。祖父までは門中墓ですが、父は分家だったのでお墓は川原にあります。昭和16年に両親と私の3人で来ました。父は農業をやりたくてここに移ってきたのです。土地は戦後に払い下げになったということです。豊見城村長の上原恒雄さんは名嘉地の出身で、私のおふくろが名嘉地でしたから、その関係でここに来たと思います。

#### 作物

**陸稲** 入植してしばらくはサツマイモと薪が主な収入源でした。芋は戦前、戦後ともよくできましたよ。陸稲もそうです。川原、開南地区では陸稲を作っていました、開南が先でしたかね。陸稲の種をどこから持ってきたかわかりません。ウチナーからではなかったと思います。陸稲も米の時期と同じ頃に植えたと思います。あの頃は米は何でも美味しいですよ、白米であればとにかく収穫の時期は美味しかったです。脱穀機は千歯だっごくきではなく足こぎの脱穀機でした。畑でやって干すんです。ニクブクむら(藁で編んだ敷物)もありましたね。

**水田** うちの親父が田んぼを作っていました。川を渡って両方に脱穀したものを長い距離、運んだ記憶があります。今のスクバルダムの下の方です。馬車で行けるのは途中まで、そこから2キロほど馬に乗って上まで行きました。とにかく川伝いに馬でカシガーくろを鞍にかけていきました。芋が食生活の中心でなくなったのは戦後です。

## 家畜

**馬** だいたいどの家も馬は飼ってました。馬は必需品です。馬には糠と芋を炊いて、それをかき混ぜたのを食わせてました。草はマカヤとススキです。それとたまにアカバナーもあげましたね。農耕用の馬でも馬車でも蹄鉄はしてました。最初は四箇に蹄鉄をしてくれるところがあって、戦後は大浜にもできたのでそれからはずっと大浜でやってました。

**山羊** ヒージャー（山羊）は食用と堆肥を作るために飼ってました。各家庭にいましたよ。たくさんは飼ってません、せいぜい1、2頭です。

**鶏** 鶏も放し飼いです。あれは地鶏だったかな、あの時分の鶏はなかなか卵を産まなくて、それで白色レグホーンになったのです。あれはよく卵を産みますからね。この周りは木ですから、鶏は夜は木の下で寝たりしてました。

**豚** 豚も養ってました。豚小屋の跡も残ってますよ、ここでもウチナーと同じでウーフルです。便所があってその下に豚がいました。ウーフルはあわ石で囲ってました。当時は今のトイレットペーパーがわりとしてユウナの葉を使ってました。それでどの家でもユウナを植えてあったと思います。

**水牛** 水牛は一番金のかからない家畜ですよ。何でも食うし、というか自分で食べます。今でもそういう飼い方じゃないですか。周りの原野につないで、そこに水たまりがあれば何日も大丈夫。農耕用でもいけるし、車を引かせてもいけますね。

## 暮らし

**家** 戦前は石油のホヤランプでした。部屋ごとにあるのではなく家全体に1つです。戦後まで台所は土間でカマドは土で出来てました。ヒヌカン（火ヌ神）も台所にありました。蚊をよける蚊帳はつい最近まで使ってました。布製で寝ていた一番座で使ってました。床は竹葺きで、竹は於茂登岳からとってきたものです。ダキ（竹床）の上に畳を敷きました。戦前から畳を使ってましたよ。カマドから石油コンロになったのは終戦後ですかね？その前にワクラカマドもありましたよ、それも長く使ったと思います。ワクラ、石油、その後にプロパンガスです。

**井戸** 水は井戸を利用しましたが、各家庭に掘ってました。ただの打ち込みで10メートルもいかない浅い井戸です。一番下の泥の上にサンゴ石を積んで、その上に石垣を積む。どこを掘ればというより、どこでも掘れば水が出ましたよ。水の質も良かったです。だからここは簡易水道の時期はなくずっと井戸を使って、水の苦労はなかったです。

**ハブ** ハブはたくさんいましたね、入植したての頃は食べるのがそんなになかったですから、ハブも捕って食べました。みたら追いかけて捕りました、それだけ味がいいのです。鶏みたいな味で美味しかったです。焼くのではなくスープにしました。スープにすると鶏かどうかかわらないです。

**マラリア** 僕らは常時マラリアでした。お腹はふくれるし、ものすごく熱が出るんです。マラリアの種類は知りません。キニーネという薬は戦後で川原に保健所もできて、保健所の駐在員がいました。そこで薬を全家庭に配って記録してました。とにかく戦後のマラリアの大流行は酷かったです、ここも大変でした。

**学校** 最初は先生をしていた瀬長弘さんの屋敷のところに川原分校がありました。僕は小学校は開南小学校、中学校は大浜中学校に通いました。開南小学校が今の川原小学校になってる

のです。中学校には於茂登の子も通ってましたね、昔の通学路にあたる宮良川につり橋がかかってました。みんなこのつり橋に遊びに行ってたんじゃないかな。また、以前は川原小学校には川原、開南、於茂登、三和から生徒が来てました。今は川原と三和の 2 カ所から生徒が通って来ます。だから今でも運動会は部落総動員です。生徒数が減って十数人しかいないですよ。僕らの子供のときは 100 人近くいましたけどね。



川原小学校(2007年)

**八重山方言** 地元の人も方言を使わないで標準語でした。石垣の人は与那国の人の話す言葉がわからない、むずかしいですよ。そして僕らも入植して方言を使うのは親の世代で、ほとんど子供の世代は使わないですね。豊見城では僕らの年代でしたら、ほとんど方言を使えるでしょ、僕らは使いきれなくてね。今、考えたら、方言を使えたらよかったなあって思いますね。

**戦争** 戦争がはじまった時期は後ろの山の方に行きました。そこに部落の防空壕がありました。村のすぐ側です。だから夜から布団を被って行った記憶があります。うちの親父(大城亀一)は防衛隊で白保の飛行場に行きましたが、夜は帰って来たりすることもありました。空襲で家が焼けたという被害はないですが、焼夷弾の記憶はあります。何かあると木の陰に隠れたんだが、嵩原さんのお母さん(嵩原カマド)だけが木の下で機銃掃射されたということがありました。

**引き揚げた人** ここから沖縄本島に戻ったり、四箇に移った人もだっていますね。川原では農業で飯が食えないということではないです。川原はパインが有名ですし、わりと規模も大きいですから住むには困らないです。でも、なぜ川原から引き揚げたかということ、一番の理由は後継者問題だと思いますよ。それと、もう年をとって故郷がいいだろうということで帰って行ったんだと思います。

## ⑤当銘 太郎

大正 6 年 1 月 28 日生、字保栄茂出身)

調査日時 / 2007 (H 19). 11. 15 場所 / 当銘太郎 宅 (保栄茂 在)

聴取 / 赤嶺みゆき テープ反訳 / 当銘涼子 文 / 鳥山やよい

**南洋行き** 私は字保栄茂の生まれです。家族は 5 人で父が当銘桃吉、母がカメといます。父は私が 12 歳のときに逝ってしまいました。私は長男で下に弟、妹がいます。私たちには畑がなかったので、父が亡くなってからは母がタチアチネーといって日常生活の品物を那覇から取ってきて、糸満の阿波根辺りを回って行商してました。私は弟妹の面倒をみながら第二豊見城尋常高等小学校(現・座安小学校)に 3 年生までいました。

南洋へは 9 歳のとき、保栄茂に南洋から一時帰郷してる人がいて、向こうで農業の手伝いをする子供がほしいということで、私が連れて行かれました。最初はサイパンに行きました。



サイパンには2ヵ年程いました。白いご飯を食べてましたから沖縄よりは良かったんじゃないかな。学校には行きません、1日中畑で仕事をしてました。そしてテニアンに渡りました。そこも同じ保栄茂の人の世話になりました。この人は畑をたくさん持ってたので、4年間砂糖キビの仕事をしました。

それからパラオです。そこには保栄茂の人はいなかったけど、自分で行きたかったので行きました。そこで大工の仕事をはじめて沖縄にいる母と弟妹を呼び寄せました。私が21、2歳のときです。八丈島の方でオキヤマさんという大工の棟梁とうりょうがいたので、この人に頼んで教えてもらい、弟も一緒に世話になりました。大工職人が7、8人いて棟梁のもとで仕事をしてました。パラオにはアルミの採掘場があって、その会社の社宅などを請け負ってました。

26歳頃、戦争になって現地召集されました。私は陸軍で、弟はヤップ島で無線の仕事をしていましたけど、熱病に罹って病院で亡くなりました。母もそこで亡くなりました。妹は陸軍病院で看護婦をしてたのでずっと軍と行動をとともにしてました。妻のフミとは引揚のあと沖縄で結婚しました。妻も保栄茂出身です。

**戦後の生活** 私達が帰ってきたのは戦争が終わって半年経ってからだったかな、保栄茂の馬場ばばに大きなテントをたてて部落民はみんなそこで共同生活してました。米軍から配給もあって各家庭、家を造ったのです。しかし、南洋から戻ってきたら焼け野が原で寂しい思いでした。保栄茂に引き揚げてきた後も大工仕事です。だんだん平和になってくると内地からどんどん良い材料が入ってくるようになってきました。それからは那覇の材木屋で買って造るようになりました。

**神田村** かみだ ある部落で家を造ってるときに、そこに保栄茂の大城満栄さんが見えていて「八重山は楽しいよ」という話に花が咲いたわけです。大工仕事しながら「あんな話があるのかな」って思いました。「ヤンバルより大きいよ」っていうことだったから、まずは行ってみないとわからないと思って、家を造る仕事が終わった後に八重山に行ってみました。私が37歳の時です。向こうでは大工仕事はしませんでした。



神田村(2007年)

私たちは戦後の自由移民ということになるんだろうな、何でまた川原じゃなく宮良に行ったかという、満栄さんの弟の大城加那さんの世話で宮良に土地を買ったわけです。そこは宮良だけ「神田村」と呼ばれてました。原名はタフナ一原ぼるといひます。明和の大津波の後にここに小浜島からたくさん人が移ってきたという話で、その頃に「神田村」が出来たらしいです。私たちが移ってきたときには家はないですよ、でも「神田村、神田部落」と呼ばれてました。片仮名でカンダ、カミダでもいいらしいですね。豊見城村からここに来たのは私が一番早く、私たち家族も含めて4家族でした。明和の大津波の大きい石を中心にした回りが私の畑になってました。4町歩余り(約1万2,000坪)あります。モクマオウの木も私が植えたんですよ。畑には最初、芋とサトウキビを植えました。それからパインをやって、またサトウキビに戻ったのです。

キビとパイン キビは磯辺にイシトウ（石垣製糖）の大浜事業所がありましたからそこに搬入しました。パインは、水はかけないけど消毒はしましたよ。ネズミの被害、またコウモリの被害がありましたね。コウモリは夜になったらたくさんきましたよ、匂いが強いから美味しいパインがよくわかるみたい。パイン工場は 6、7 ヲ所はありましたからパインの盛んな頃は大変でしたね。パインブームっていっても、ずっと前から八重山に行った人たちはブームに乗ったけど、私たちが行く頃から下火になって生産過剰で工場の処理が出来ないぐらいになってました。機械もないから水牛だけが頼りでしたが、だんだん落ちてきてトラクターやブルドーザーも出てきて開墾もたやすくなりました。今は昔のように難儀しないでも出来るようになってるから楽しいはずですよ。

保栄茂へ帰る 宮良の豊年祭には部落から案内状がくるようになって参加しました。地域の一員として認められたようで嬉しかったです。うちが葬式をしたときは、八重山にいる豊見城の人がたくさんきてくれて、いろいろとお世話になりましたしね。保栄茂郷友会は私達が引き揚げた翌年から始まってますから、私は入れませんでした。

64、5 歳の頃に保栄茂に戻りました。帰った理由は私の生まれ故郷だから、最後は故郷に居たいからです。子ども達が向こうで跡継いで農業をやるというんだったら土地も手放さないけど、みんな農業しないというんで、やらないんだったら土地も持つて意味がないから手放しました。家族に「全部処分して引き揚げるよ」って言ったら、「お父さんが思うようにやりなさいよ」というもんだから帰ってきました。

## ⑥当銘 <sup>やすかめ</sup>保亀

昭和 5 年 9 月 4 日生、宇保栄茂出身

調査日時 / 2007 (H 19). 10. 2 場所 / 当銘保亀 宅 (名蔵 在)

聴取 / 崎原恒新、赤嶺みゆき テープ反訳・文 / 鳥山やよい

学童疎開 僕は昭和 5 年 9 月 4 日、宇保栄茂で生まれました。戦争中は 2 ヲ年間、宮崎県 <sup>ひがしうすきぐんきたごうそん</sup> 東臼杵郡北郷村 (現・美郷町北郷区) に学童疎開してました。その村には僕ら学童疎開の約 45 名と、他に一般疎開の 2、3 世帯がいました。豊見城第二国民学校高等 2 年生で、今の中学 2 年生、13 歳の年齢です。僕は一番末っ子で兄貴たちは兵隊に行っていました。高等 2 年で北郷国民学校を卒業して青年学校も 1、2 年は通って訓練させられました。昭和 21 年に沖縄に帰ってきました。那覇に上陸して DDT をかけられ、久崎崎に行って一昼夜過ごしました。翌日、豊見城第二国民学校の運動場に着きましたが、家族は迎えにきませんでした。僕の戦争の被害は大きいです。父、母、長男、次男、姉、姉の子の 6 人が亡くなりました。生き残ったのは長男の嫁とその子だけです。それもヤンバル (沖縄本島北部地域) に避難していて命カラガラだったそうです。しばらくして兵隊から帰ってきた兄 (三男) が僕を引き取ってくれました。

八重山へ 保栄茂に帰っての仕事は農業です。食糧のため芋 (沖縄百号) を作りました。親戚の当銘カンイチさんが八重山を見に行って「八重山が良い、どうせ農業するのなら行こう」

ということになって昭和34年に八重山に来ました。しばらくは親戚の家で農業をして、あっちこっちと土地を求め、翌年によく名蔵に落ち着いたわけです。川原は政府の計画移民でしょ、僕は個人で来たので自由移民、だから政府の恩恵は小さいありません。この土地は先に小作していた砂川マサオという宮古の城<sup>くすくべ</sup>辺の人から名義を買いました。畑は2カ所、今持っている土地は全部で3町歩9反(1万1,700坪)です。この土地の持ち主は大日本製糖株式会社で不在地主でした。その後イシトウに渡って、戦後の昭和49年11月に払い下げになったわけです。その前に名義も買ってるので、二重払いしたことになりますね、総額で2万5,640円で、お金は農協に貸してもらいました。保栄茂出身の妻とはここで結婚しました。

自分らの食糧用に野菜なども作ってました。芋、ゴーヤー、シマ大根、青首大根、二十日大根、ウンチェー(ヨウサイ)、山芋などです。名蔵で電気がついたのは川平より先ですが、沖縄本島に比べれば大変な遅れで、まだホヤランプの生活でした。東京オリンピックも家内と一緒に電池式のラジオでバレーボールの試合中継を聞きました。名蔵にいるウチナアンチュは豊見城から5軒、糸満から2軒、後は宮古の人です。

ヤキー(マラリア)は大丈夫でしたよ。かえって沖縄にいるときに罹りましたね。親はやっかいだなあって言っていました、熱が出たり引いたりで大変ですよ。そのときは糸満まで注射しに行って、帰りに熱が出て命がけで歩いたことがありました。

**砂糖キビ** 購入した畑は作物が植えられていたのか、更地だったのか覚えてません。私が植えたのはキビで製糖工場に出すもので、ほとんどNCOと310号でした。苗は製糖工場から買いました。今の畝<sup>せはば</sup>幅はハーベスターを入れるので1メートル40センチありますが、昔は「馬農業」だから1メートル20センチでした。

八重山の場合、キビの植え付けは夏植えの方がメリットが大きいです。僕が主に植えてるのは9号と222。NCOの代わりが9号で、9号のいいところは台風に強いということ。8号は糖度は高いけど台風と害虫に弱いです。キビ刈りには今はハーベスターを使っています。家内が骨折してからは完全に機械になっています。ハーベスターの借り賃はトン当たり3,000円~5,000円。人間がやっても機械がやっても、農家が払うお金はかわらないですよ。ここの農業は機械化農業で広々としてるのでよく北海道に似てるといわれます。

**害虫** 農薬を撒くのも機械です。肥料が出るところと薬が出るところがあります。薬もいろいろありますが一般には錠剤のエカチンを使います。害虫には沖縄でいうシンムシと臭い虫のガイターというのがいます。ここでは年に2、3回は農薬を撒きます。ハリガネムシは薬を撒かないと大変ですよ、でも毎年ずーっと農薬を使っていると、薬が砂糖キビに入ります。クロ病というのは先の方が黒くなるんだが、罹ると手の施しようがないですね、先っちょだけ切るんじゃなくて根っこから取って焼却するという指導です。クロ病にかかったらブリックスが落ちるところじゃなく、細長くなって、まるでグシチャー(ススキ)のようになります。

**害獣** 僕らが来てから猪の被害はありません。被害といえばネズミとコウモリ。僕は開南でパインを作りましたが、コウモリは夕方5時頃、まだ明るいうちから飛んで来ました。コウモリは面白いもんで、一つ食ったら、その同じパインを皮がなくなるまでずっと食っ

てるんです。だから<sup>かじ</sup>囓った実に農薬をつけたら明日には死んでいるわけです。ネズミはコウモリと違って次から次にでたから大変でした。今日はこれ囓って、明日はあれ囓ってって被害は大きかったですね。カラスもパインを食います、降りてきて下の美味しいところから食いますよね。囓られたら商品にならないし、やっかいです。ネズミ退治はヤソニンでやります。でも、カラスはそれが大好物で、ヤソニンをパイン畑やキビ畑に投棄するのを見られると、それだけ食っていきます。猫は死にますが、カラスは死なないです。白鷺<sup>しらさぎ</sup>は、トラクターのエンジンをかけたらハリガネ虫などが好物なので、すぐ飛んで来ます。音でわかるんですね、おりこうさんですよ。パインを食べることもないし、白鷺は害のない鳥です。

**パイン** パインを植えたのは砂糖キビから2、3年後です。こっちでも最盛期にはみんなパイン、パインで、ブームの頃は全島で4トンぐらいあったという話です。それが今では2千トンほどで、加工じゃなくて郵パックで出す生果が主です。

以前はオキカン（沖縄缶詰）にだしてました。ブームの頃は収穫したら、会社側が大きなバーキ（籠）を持ってきて計って運んでくれました。小さいものも1級、大きなものも1級なんて良い時代がありましたよ。等級は甘さではなく大きさでした。会社が原料を自分のとこに集めるために全部1級にしてたんです。缶詰用と圧搾してジュースにしてました。研修もしてくれて会社側が労務者も雇ってくれたんですが、それも段々なくなって、自分で持つようになっていきました。そういう時代も平成12年まで続きました。その間に工場もなくなりました。

オキカンに出していた頃のパインは台湾種で、その後タイ種が入ってきました。これは誰が持ってきたかわかりませんが、結構、みんな作ってました。その後ハワイ種がきました。ハワイ種は味はいいですが病害虫に弱かったです。今は沖縄試験場や名護試験場で作っている品種ですが、詳しいことはわかりません。品種はいろいろありますが、缶詰用、生果用の区別はないです。僕らのはせいぜい1キロ上等なもので50円。缶詰はキロ20円です。砂糖キビよりパイン作りの方が安あがりです。今は生果用に作ってますが、磯辺にある<sup>あつさく</sup>圧搾してジュースを作っている工場に出荷してます。ジュースはここ4、5年のことです。

**よその土地で暮らす苦勞** 学童疎開してるときに「ヒーサヌ、ヤーサヌ、サビサヌ（寒くて、ひもじくて、寂しくて）」というのを経験しました。ウチナーとは違って旅先での寒さというのは大変でしょ、地元の人とのトラブルもありました。ひもじいでしょ、命がけだから、畑から盗って食べたりして、抗議されました。それと同じで移民というのは見知らぬ国に行って大変な苦勞です。僕は移民というよりは引っ越しという感覚でしたが、それでも大変な思いでここまで来ました。川原には保栄茂郷友会があつて、僕もビンチュだから参加していません。前は十五夜に踊りをやっていた、婦人会、青年会が練習して公民館で踊っていました。今はゲートボール大会をやっています。

調査協力者・協力機関一覧（順不同）

上原恒正 上原重雄 大嶺保義 当銘太郎 当銘幸吉 当銘神栄 上原フミ 藤田ふじ 平良辰男 大城秀夫  
 当銘正助 当銘秀子 長嶺初子 上原トヨ 大嶺保政 上原キヨ 当銘保亀 當間清助 大嶺保平 長嶺政義  
 長嶺フミ 大城シゲ子 大城亀次郎 上原重次郎 具志堅興栄 保栄茂郷友会 川原公民館 石垣市役所



調査へのご協力、ありがとうございました！

## むすびに

豊見城村からの最初の渡航者は、1899(明治32)年、宇饒波<sup>のほ</sup>出身の長嶺保榮から始まります。長嶺の渡米以後、ハワイ、ニューカレドニア、メキシコ、カナダ、フィリピン、大洋島、ペルー、ブラジル、アルゼンチン、瓜哇<sup>ジャワ</sup>、キューバ、ボルネオ、東インド、アメリカ、シンガポール、南洋群島、八重山、大東島、日本本土、満州への渡航者を確認していますが、その正確な人数については現在調査を進めています。

最初の渡航者からすでに100年という時間が経ち、移民調査の時期の遅さも感じていますが、それでも石垣島での調査では、多くの証言を得ることができました。これらの資料は、今後、本市の貴重な歴史の1ページになると思います。

今回の調査では、調査を予定していた方の急<sup>きゅうせい</sup>逝や、台風接近による調査の切り上げにより、いくつかの課題も残りました。しかし、資料だけでは分からなかった、新たな八重山開拓の歴史を見出せたのではないかと思います。調査で得られた証言や資料は、『豊見城市史 移民編』へ収録していきますので、引き続き調査へのご理解、ご協力の方をよろしくお願ひします。

石垣島での現地調査を行うにあたり、多くの方々からご協力をいただきました。特に、話者の選定や紹介をいただきました上原恒正<sup>こうせい</sup>さん、故大嶺保義<sup>やすぎ</sup>さん、當銘神榮<sup>しんえい</sup>さん、上原フミさん、當銘正助<sup>せいすけ</sup>さん、一週間という短い期間の中、ご尽力いただきました崎原恒新<sup>こうしん</sup>市史編集委員をはじめ、関係者並びに関係機関へ深く感謝申し上げ、むすびの言葉とさせていただきます。

## 参考文献

- 『川原入植五十周年 記念誌』川原入植五十周年記念事業期成会/1991
- 『ドキュメント 八重山開拓移民』金城朝夫/1988
- 『八重山の台湾人』松田良孝/2004
- 『保榮茂ぬ字史』豊見城村字保榮茂字史編纂委員会/2001
- 『沖縄パイン産業史』林登/1984

## 挿入写真について

- 2頁・・・文化課撮影
- 4頁・・・〃
- 5頁・・・『川原入植五十周年 記念誌』67頁、86-87頁、上原恒正氏提供
- 8頁・・・文化課撮影
- 9頁・・・『川原入植五十周年 記念誌』61頁、上原フミ氏提供
- 10頁・・・文化課撮影
- 12頁・・・上原恒正氏提供
- 16頁・・・〃
- 19頁・・・文化課撮影
- 22頁・・・〃
- 23頁・・・〃
- 27頁・・・〃

## 調査者

崎原 恒新（市史移民編専門部員）  
赤嶺みゆき（市史移民編担当嘱託員）

## 執筆

鳥山やよい  
赤嶺みゆき

---

## 豊見城市史だより 第10号

2010(平成22)年3月31日

### 編集・発行

豊見城市教育委員会 文化課  
901-0232 豊見城市字伊良波 392 番地  
TEL (098)856-3671  
FAX (098)856-1215

印刷 金城印刷

---

### 文化課スタッフ

文化課長	宜保 馨
文化係長	与那嶺豊
主査	大城竜也
嘱託	儀間淳一 赤嶺みゆき
	久田千春 鳥山やよい
	瑞慶覧峰子
臨時	我那覇祥子 比嘉香織

